

インフルエンザ様疾患 罹患時の異常行動と 使用薬剤

KEY WORDS

- インフルエンザ
- 異常行動
- オセルタミビル
- ノイラミニダーゼ阻害薬

Association among abnormal behavior of influenza patients and administered drugs.
Yasushi Ohkusa (主任研究官)
Tamie Sugawara (主任研究官)
Nobuhiko Okabe (所長)

国立感染症研究所感染症疫学センター 大日 康史, 菅原 民枝
川崎市健康安全研究所 岡部 信彦

はじめに

2007年2月、インフルエンザに罹患した2人の中学生が相次いで高所から飛び降り、死亡事故があったために、合併症や既往歴などからハイリスク患者と判断される場合を除いて、オセルタミビルの十代患者への使用を差し控える旨の緊急安全性情報が2007年3月21日に出された¹⁾。また、その後市場に登場したその他の抗インフルエンザウイルス薬についても、添付文書において、十代患者の使用に関して注意喚起がなされている²⁾⁻⁵⁾。さらに、厚生労働省は、2007年4月以降、インフルエンザの経過中には抗インフルエンザウイルス薬の使用の有無に関わらず、保護者は異常行動について注意するよう、注意喚起をしている⁶⁾。こうした対応は、毎年開催される厚生労働省薬事・食品衛生審議会(医薬品等安全対

策部会安全対策調査会)で再検討され、今日に至るまで継続されている。

インフルエンザ罹患時における異常行動の発症について、特に使用薬剤と異常行動の発症の関連について、多くの研究が行われてきた⁷⁾⁻¹⁷⁾が、2015年4月現在、異常行動の発症の要因は明らかになっていない。が、「インフルエンザ様疾患罹患時の異常行動に関する研究」(厚生労働科学研究委託費 医薬品等規制調和・評価研究事業 研究代表者：岡部信彦)では全医療機関においてインフルエンザ様疾患罹患時に異常行動を示した症例の情報が収集され¹⁷⁾、インフルエンザ様疾患に罹患した際の異常行動についての要因が分析されている。小文においてはその結果の概要、特に使用薬剤との関係についての結果を紹介する。